て相勤め、其外最寄大名手宛は有之候へ共、差當り右人數にて大洋を引請け、事情も不分異船を相待ち候儀不容易と奉存候、然るに其場所は御膝元近く、殊に咽喉の要路に御坐候へは、縱令何事も無御坐候共、御國躰にも相拘り候間、何れにも御改正被仰付候方と存奉候、一躰伊豆相摸安房上總と申す中にも、相摸安房上總は表大洋を引請け、內海富津は控扼の要路にして忽に難仕地勢に御坐候間、彼是存合篤と勘考仕候處、相摸國三浦鎌倉兩郡の內并に安房國には城持大名一人も無之、上總には大多喜久留里佐賀に小家の大名居城有之のみ、其餘は陣屋并に出張陣屋迄にて、誠に空疎の形に相見え申候、已に長崎は異國交易の地、松前は夷狄の境に付、夫々大祿の者へ御手宛も被仰付置候由、全く外國關係の場所ゆゑの事と奉存候、然る處近來異船總房の海上へ年々相見へ、又は屢々浦賀表へも罷越し候、右は薪水を乞ひ交易を願ひ候迄に候はゝ仔細も無之候へとも、萬一禍心有之相越し候上は如何にも御手薄の儀にて、都て岸深の海岸に候へ共、大船より直に上陸仕候事先は不相成、何れ艀にて乘付候へば遠淺に候とて左のみ頼みには相成間敷、相摸伊豆安房上總の國は海中に出張し居り、何れへ上陸可仕も難計、殊に海邊場廣の儀一切不致樣には相成間敷、縱ひ上陸仕候共、防禦御手當相屆き御國躰を不失樣被爲成置候事專一の儀と奉存候、間十万石以上御譜代大名三人程も相摸安房上總の諸國へ國替被仰付、外御用向先は不被仰付、海陸共御手當一途に相守り、猶ほ調練不怠樣折々御見分被仰付度、戰國の世迚も對陣につかれ、よもやに怠り狼狽仕候例し不少、增して太平無事の今日何時と定りも不付候間、異船の備等閑に成行候は必然の理に御坐候、然るに御膝元に於て万一の儀御坐候へは外國へ對し御外聞に相拘はり、誠に無此上御大切の儀と奉存候、右國替の大名一人は相摸國三浦郡の內に居城被仰付、同國御備場は勿論三崎町へ陣屋を補理し人數差置き、三浦鎌倉兩郡の海岸御固の相心得、其餘同國海岸は大久保仙丸相心得、一人は上總國周淮郡飯野村邊へ居城被仰付、富津の御備場は申すに及はす房州船方郡古村邊へ出張し、陣屋を補理し同州外浦通白子まて相心得、一人は上總國東金邊へ居城被仰付、右白子より海岸通り下總國犬坊々崎迄相心得、且つ右東金より江戸迄道程纔か十六里ならては無之御程近の場所にて候間若し異人上陸仕候節の御手當を被爲置候はゝ、後々は御世話も輕き儀と奉存候、尤右國替被仰付新に城築致候年限を以て諸役一切御宥免被仰付候に於ては如何樣にも成就可仕候、左候へは御國躰も相備り万一の御患も有之間敷と奉存候、右時宜の樣酌も不仕樣には御坐候へとも、御國躰の御輕重は御深慮の御權度に付十分見込の處申上候

一相摸國觀音崎御臺場見分仕候處、直立二十七間にして上總國富津御臺場へ海上一

里三十二町十九間餘深サ二十尋より六十尋位迄に御坐候前書の直立にては大筒放發の辨理不宜候間遠見番所は其儘被差置御臺場計り同所下字長崎と申す所(本文長崎と申すは鳥居耀藏申上候大坂の義に御坐候)へ御引下け御坐候方と奉存候、尤右場所は海防の要路に付新規御臺場御取建可相成地形篤と見分仕候處鴨居村の內字三軒屋岬走水村の內十石崎同猫山岬都合三ヶ所にて右の內猫山岬は尤可然地勢に相見え同所より右小三塚迄海上一里三町四十四間餘深さも二十尋より四十尋位迄にて廻船富津の出洲へ不乘掛樣心懸けスボマリ飄通り候間何れも可然地勢にて端船差出候都合も宜敷候間右三ヶ所へ新規御台場御取建に相成り鴨居村枝鄉右三軒屋濱走水濱へ端船二十五艘つゝも被差置候樣奉存候然る上は万一異船飄入候共相州方は觀音崎三ヶ所の御台場上總の方は左の個條に申上候新規に御築建の小三塚御台場より挾打に致し右三軒屋走水濱幷に富津に被差置候端船共双方より申島沖へ乘出し悉く打立て候はゝ三方より防禦に付行屆可申奉存候、

一異船相見へ候節少しも早く御備場詰の者共心付不申候ては不手練に付城ヶ嶋幷に洲の岬へ大筒被差置異船見掛次第相圖の號砲を打放候樣致し相州の方は劒崎千駄岬平根山觀音崎を狼烟を以て請繼き安房上總の方は犬坊岬明金崎竹ヶ岡富

津等前同樣請繼き候はゝ夫々手配も行屆可申奉存候、

一平根山御臺場の儀直立二十七間竹ヶ岡御備場へ海上二里十八町二十間餘にて船路の樣子篤と見分仕候處銘々向々に飄通り一定不仕候乍去御取拂の御場所共不被存且前同樣放發の辨理宜しからず候間浦賀港口燈明堂有之場所へ御臺場計り御引下け遠見番所は其儘被差置端船の儀は五艘も浦賀港に被備置異船の模樣に依り乘出し船打等も致候方と奉存候、

一竹ヶ岡御臺場直立二十七間にて前同樣に候間隣村萩生村地內字八坪と唱へ候場所へ御引上け遠見番所は是迄の通り被差置端船五艘も同所濱へ御備被置浦賀同樣相心得候方可然と奉存候、

一富津御台場は平地に御坐候へ共前條にも申上候通り大船出洲を外れ乘通り候事故右御台場よりは町數遙かに延居り出洲の內字小三塚と唱へ候場所滿汐の節にても深さ二尋迄は無御坐候間右場所へ新規御台場御築立嚴重御備相立候はゝ前書申上候通り便利も宜く候へ共川々御普請と違ひ海上新規御築立に相成候儀は方法疎と見極も付不申候間其筋堪能の者へ御尋御坐候樣仕度奉存候且又富津濱へも端船五十艘も被差置前書の通り鴨居村走水村より申島沖へ乘出候と同樣乘出船打致し可然と奉存候、

一平根山觀音岬城ヶ島竹ヶ岡富津御備筒見分仕候處、貫目以上御筒二十一坐の内五貫目筒四坐二貫目筒一坐一貫目筒二坐は御用立不申、異國にては別紙の通りの次第に付御備筒是迄の姿にては餘り御手薄の儀と奉存候、

右は十分の見込を以て申上候趣書面の通りに御坐候、一躰相州城ヶ島は房州の岬と相對し海門の儀に付、異船渡來の節身命を擲ち何樣にも防戰可仕場所に候得共、場廣の海上端船を以て喰留候事は實に伏雞の狸を搏ち乳犬の虎を犯すか如きものにして如何とも致方無御坐、依之海城の如き堅實の船御打立に相成り異船の帆形沖合に相見へ候へは速に乘出し防戰仕候事海防第一の計策に候得共、大船御打立の儀は如何にも不容易候に付差扣、前書の通取調候儀に御坐候、乍去存込の趣は一應申上置候、

一中分の見込を以て申上候へは、大名國替居城被仰付候儀御見合、其外前書の通にて文化度の御振合に御復し、十万石以上大名の内心得宜敷もの御撰み領地國替の上、相州へ一人房總の方へ一人、双方共御備向都て大名持に被仰付、時々水陸の調練等仕候樣罷成候はゝ可成にも御座有るべく哉と奉存候、其餘外浦通御固めの儀は是迄相心得候向々へ、猶亦無油斷樣嚴重に被仰渡候方と奉存候、

右初ヶ條二ヶ條とも大名持に相成候事に付、玉藥は不及申水手遣方粮米貯方其外共銘々の存寄も可有之候間別段不申上候、

一御手輕の見込を以て申上候へは、觀音岬御臺場前書長崎へ御引下けにては御入用多分相掛り候場所に付、直に御臺場下へ御引下け、箒山へのみ新規御臺場御手輕に御築立の上御見計を以て端船をも御造立に相成り、役々水手共異船渡來の砌骨折候ものへは厚き御稱御座候趣に兼て被仰渡御座候方可然と奉存候、其餘前條の廉々は不殘御見合、都て是迄の通り浦賀御奉行御代官森覺藏相心得、粮米其外の御取締嚴重に被仰付候方と奉存候、右は一ト通りの御改正にては御入用掛り候丈け御備は難立、都て御不益にも可相成哉に奉存候間、御手輕見込の廉は可成丈御入用不相嵩樣取調申上候儀に御座候、

右は御備向三段に取調候趣書面の通りに御座候、外異の者是迄不屆至極の次第も有之候に付ては、彼の地の事情をも探索の上彼是勘考仕り夫々御仕法申上候、尤鳥居耀へも書面の趣申聞置候、依之別紙外國の事情申上候、書付一冊繪圖四枚相添此段申上候以上、

亥四月

詩文雜記

老子論(承前)

緒論　第二老子哲學の淵源

文學士　薗田宗惠

凡そ千歳に傳ふるに足るへき學説は、未た一朝一夕の考案より成れる者あらす、其材料となるものは已前より漸次輯集せられて、既に其學説の地歩を爲すに非れは決して卓絶せる新案の成立を來す者に非す、論理學は素より、アリストートルの始て組織せる者なれとも、氏は唯從來存せし材料を規律を立てゝ大成せし迄なり、決して其材料をも亦手にて發見せしには非るなり、近代哲學家の泰斗たるカントの批評哲學は、カントの組織せしに相違無きも、其地歩を爲したるヒュームデカーツ無くば、豈にカント哲學を見るを得んや、老子も亦然り、一呼して此學の生せしに非す、必すや淵源無かるへからす、是れ上に前代學説を哲學組織の一要素と爲したる所以なり、故に老學の淵源を探求すると必要なり、然れとも其事蹟の書契に見るへきもの無けれは、其淵源を探求すると甚た困難なり

今他書は暫く措て、老子經に就て見るに

古之所謂曲則全者豈虛言哉(第廿二章)

故建言者有之、明道若昧、進道若退、夷道若類、上德若谷、大白若辱、廣德若不足、質貞若渝、大方無隅、大器晚成、大音希聲、大象無形、道隱無名(第四十一章)

故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自朴(第五十七章)

用兵有言、吾不敢爲主、而爲客、不敢進寸、而退尺(第六十九章)

故聖人云、受國之垢、是謂社稷主、受國之不祥、是謂天下王(第七十八章)

已上擧くる處に由れは、右の所謂故建言者有之、故聖人云、用兵有言等の語を用ゆるを以て、明了に他より引用せる者なるを知る、是れ他書を待たすして老學の淵源する處あるを證明する者なり、然れとも此等は單に依憑する處あるの實を示すに止まり、如何なる人の説を採用せしやを知るに由無し、故に他書に徵して其淵源を求めさるへからす、今漢書藝文志を見るに、黄帝、伊尹、太公、辛甲、鬻子、莊子(即ち管子)の著を道家書中に列擧せり、是れ皆老子已前の著述なり、左れは集めて大成し一家の哲學系統を組織せしは老子自己なれとも、道家主義は既に老子已前に存せしや疑無し、故に老子は之を材料とし、思考力を以て一大組織を起したる者と云へし、唯吾人は此等の書が今日存せざるが爲めに、此等の人々が其哲學を老子已前に如何なる程度に迄發達せしやを徵する能はさるを悲まさるへからす、勿論今日素問靈樞宅經の如き、黄帝の作と稱

すと雖も、其僞書なると四庫全書總目提要の處論にて明かなり、併し黄帝の書の嘗て世に存せしとは疑ふへからさる事實なり、唯今日傳ふる處は僞書なりと云ふのみ、故に賈誼の治安策には

黄帝曰日中必熭、操刀必割

と云ひ、又老子に谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根、綿綿若存、用之不勤、と云ふの語を以て、列子には黄帝の言とせり、其他列子中に黄帝書曰とか、黄帝曰とか云ひて引用せる者左の如し

黄帝書曰、形動不生、形而生影、聲動不生、聲而生響、無動不生、無而生有、形必終者也、天地終乎、與我偕終、終進乎、不知也、道終乎、本無始、進乎、本不久、有生則復於不生、有形則復於無形、不生者非本不生者也、無形者非本無形者也、(天瑞篇)

黄帝書曰、至人居若死、動若械、亦不知所以居、亦不知所以不居、亦不知所以動、亦不知所以不動、亦不以衆人之觀易其清貌、亦不謂衆人之不觀不易其情貌、獨往獨來、獨出獨入、孰能礙之、(力命篇)

黄帝曰、精神入其門、骨骸反其根、我尚何存、

此等の言語に由れば、黄帝の道家者流なりしと明かなり、然るに列子の引く處は自己の法門を證明する爲めに引用したる者なれば、此引用の語句のみにては老子の法門

の材料となりしとは見えざるも、列子の引用せざる部分に、老子の材料となりし點多かりしならん、太公の作として今日素書の存するあるも、是れ亦僞書なると、四庫全書總目提要にて明かなり、故に今徵すへき無し、鬻子の如きも今日所傳の本には賈誼書及ひ文選註所引の鬻子の、言無きを以て、古今僞書考には之を僞書とせり、然れとも鬻子の言は幸に列子に見るを得、即ち

運轉亡已、天地密移、曉覺之哉、故物損於彼者盈於此、成於此者虧於彼、損盈成虧、隨生隨死、往來相接、間不可省、曉覺之哉、(天瑞篇)

去名者無憂、(楊朱篇)

欲剛必以柔守之、欲强必以弱保之、積於柔必剛、積於弱必强、(周穆王篇)

鬻子語文王曰、長非所增、自短非所損、等之所亡若何、(力命篇)

吾人此等の知其雄、守其雌、又は不自是故彰、不自伐故有功と云か如き、老子の謙徇主義の材料に供せられたる者なるとを推知するを得

管子も今日傳はれとも、葉正則の云へる如く、一人の筆、一時の書に非す、故に管子何れの部分が正にして何れの部分が僞なるやを知るに由なし

兎に角、已上擧くる處にて老學の淵源遠きと充分なり、故に支那學者も往々之を云へり

杜道堅は谷神章に註を下して云く

列子亦有此章、然不言出于老子、而言黃帝書、則知老子五千文、引用墳典古語多、如經中凡稱是以聖人、稱古之所謂、稱建言有之、稱故聖人云、稱用兵有言、是皆明述古聖遺言、故孔子述而不作、竊有比焉、惟信而好古者、可與言此道、と

又畢沅云く

漢時以黃老爲道家言、故藝文志中有黃帝四經等篇、列子以谷神不死是謂玄牝、爲黃帝言、而莊子有猰氏頌、有聽之不聞其聲、視之不見其形云々、正與視之不見名曰夷、聽之不聞名曰希合、黃帝號有熊氏、古者熊猰聲相轉、疑有猰氏即有熊氏、然則老子本黃帝之言、大率多述而不作焉(老子道德經攷異序)

素より此等の諸書が、單に老子を以て古來の說を記述したる者の如く云ふの點は、吾人の贊成する能はざる處なれども、古來の思想を參考したりと云の點は、大に然るへしと信す

道家の思想は古代に胚胎せしのみならず、往々又之を實行したるの隱者あるを見る、許由巢父、老萊子、荷蕢子、原壤、長沮、桀溺の如き是れなり、老子は卓絕せる思考家なりけれは、此等の事蹟を參考し、又黃帝鬻子等の所說を開發し、一大組織を完成せしと明かなり

易も亦老學の一淵源なると明かなり、然れとも諸儒の云ふか如く、易を以て唯一の淵源とするは誤謬たるを免れす

凡そ老子か易を參考せしとを證明するに四點あり

(1) 老子の言ふ處易に適合すると

易は孔子の手を經て完成せられしとは爭ふへからさるの事實なり、故に林子全書には、周易一書伏羲始之、文王周公成之、孔子終之とあり、然れども何れの部分を孔子が作りし乎と云に至ては、諸說紛々たり、古今釋疑には伏羲始畫八卦、因而重之、爲六十四、周文王作卦辭、謂之周易、周公作爻辭、孔子爲彖辭、象辭繫辭、文言、序卦、說卦、雜卦、謂之十翼、とあり、史記には孔子晚而喜易、序彖繫象說卦文言、とあり、始めて文王の易の卦辭を作りしとの書に見ゆるは荀子なり、即ち其言に云く、文王囚於羑里而作易、と、孔穎達は卦辭爻辭並是文王所作と云へり、然れども升卦六四に、王周享于岐山とあり、文王の王と稱せらるゝは是れ武王の時に在り、故に此爻辭は文王の死后に係ると明かなり、又明夷の六五に箕子之明夷利貞とは、是れ箕子佯り狂して奴となり、其明を晦藏し、內其志を正ふするを云ひたる者にて、事は武王觀兵の后に在り、文王豈に之を知るの理あらんや、故に此爻辭も亦文王の死後なり、今左傳を見るに、昭公二年に云く、韓宣子適魯見易象與春秋曰、周禮盡在魯矣、吾

乃今知周公之德、與周之所以王とあり、此言に由れは易象は周公の作なるが如し、之を要するに、今の必用は老子の參考と爲したる部分は何れなりやを知るに在り、即ち孔子の手を經ざりし部分は何れなりやを知るのみにて充分なり、決して文王周公は各何れの部分を作りしやと云の穿鑿を要せず、今諸書を參考するに、今日所傳の易經は、孔子の校正に成りしも、其已前に不完全なる易經の存せんとだけは充分明了なり、吾人は素より十翼は果して孔子の作なりや、或は古來の所傳を補正したる者なるやを知らざるを以て、孔子已前に存せし者と確信し得へき部分に就て、老學の基礎となる痕跡の存せるや否やを研究するは最も安全なる方法なり、故に今孔子が作りたりとの論ある、十翼の範圍内に論歩を容れざるべし

乾卦上九に亢龍有悔とあり、之を象に釋して盈不可久也とし、文言には窮之災也とし、又亢之爲言也、知進而不知退、知存而不知亡、知得而不知喪と云へり、されは老子第九章に持而盈之、不如其已、揣而鋭之、不可長保、富貴而驕、自遺其咎と云ひ、第七十七章に高者抑之、有餘者損之と云ふは、此亢龍有悔を敷衍したる者と云はさるへからす、又蒙卦に童蒙吉と云ひ、坤卦に括囊無咎と云は、老子の所謂挫其銳、解其紛、和其光、同其塵、(第四章)なり、又坤卦に利牝馬之貞と云は、老子の所謂專氣致柔、(第十章)知其雄、守其雌、柔勝剛、弱勝强、の意なり、又師卦六四師左次無咎とは、老子の不敢進寸、而退尺(第六十九章)前爲士

者不武、善戰者不怒、善勝敵者不爭、(第六十八章)の意なり、又屐卦九二に、履道坦坦、幽人貞吉、とあり、幽人とは其中心安靜にして利欲の爲め亂れさる者なり、故に象に釋して中不自亂也と云へり、老子第十六章致虛極、守靜篤は此意に外ならず、又謙卦に謙亨、君子有終と云ひ、其九三に勞謙、君子有終とは皆謙德を稱揚する者にて、老子第三十二章功成不名有、第三章功成而弗居、第六十六章不敢爲天下先、第六十七章善用人者爲下と云も全く此意に外ならす

之を要するに、易は老學と大に其旨を同ふす、故に老學の一淵源とするを得ん

(2)易は老學の淵源たると上の證明にて明かなり、老學の淵源既に易に在り、故に此易を解釋するに當ては、儒家と雖も自家の常格を脱して、日頃駁擊する老學の所說に近つく者は又止むを得さるの結果なり、是れ第二證とするに足る、即ち

囿於物者不能物、物惟不物之物、而後能統萬物、滯於形者不能形、形惟不形之形、而後能貫萬形、(三易備道)

六十四卦三百八十四爻一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也、(讀書錄)

太極者一氣也、天地未分之前、元氣混而爲一、一氣所判是曰兩儀、(易數鉤隱圖)

太極無象、象非方非圓、不可得而形容、强名之曰極而已、又曰太極之初混然而已、(王氏易學)

太極只是天地萬物之理、在天地言則天地中有太極、在萬物言則萬物中有太極、(朱子語類)

至微者理也、至著者象也、體用一源、顯微無間、(周易程子傳伊川序)

是れ豈老子の所謂有物混成先天地生、吾不知其名、字之曰道、強爲名之曰大、(第二十五章)道生一、一生二、二生三、三生萬物、(第四十二章)無名天地之始、有名萬物之母と其旨を一にするに非ずや、儒家平素の口吻と甚た庭徑する處あるに非すや、是れ老子の根據とせし易を解する時は、老子に近くは止むを得さるの事實なるを示す者に非すや

(3) 老學が易に淵源する處ありとは、支那人及び日本の儒家も往々口にする處なり

阮籍著通老論曰、道者法自然而爲化、侯王能守之、萬物將自化、易謂之太極、老子謂之道、(太平御覽)

唐陸希聲道德傳序に云く昔伏羲氏畫八卦、象萬物、究性命之理、順道德之和、老子先天地、本陰陽、推性命之極、原道德之奥、此與伏羲同其原也、文王觀太易九六之動、貴剛尚變、而要之以中、老氏察太易七八之正、致柔守靜、而統之以大、此與文王通其宗也、

東坡上清儲群宮碑に云く臣謹按道家者流、本出於黃帝老子、其道以清靜無爲爲宗、以虛明應物爲用、以慈儉不爭爲行、合於易、何思何慮、

龍說は邵伯温の語を引て云く康節先公以老子爲知易之躰と

大學教官、評論、啓發ニ足リアルモノ、人々ニ考ヘシムルヲ要ス、亦論旨ナリ

又物徂徠宇佐美灊水佐藤穆山廣瀨淡窓も皆老子は易に基くとせり、然るに此等諸人の中には易を老學唯一の淵源と思惟せるあり、又易は唯老學の一淵源に過きずとせる者あり、易を以て唯一の淵源とするは是れ大なる誤なり、廣瀨淡窓は此點に於て大に悟る處ある者の如し、即ち氏は析玄に於て老學を評して云く

玄其本易者、易言數、玄亦言數、易言數也、以陰陽、玄言數也以有無、易道尊陽卑陰、玄則有無互爲尊卑也、然謂玄近易則可、謂玄即易則不可、以易解玄、不若以玄解玄也と

(4) 之を要するに、老子の易と一致するとは獨り此等の人の所論のみならず、又老學を好む者が往々易を好むの傾向を有する事實にても二者の性質の相近きと明かなり、若しそれ易が老學の淵源ならざりせば、豈に此の如く甚き符合を見るに至らんや、今其二者を併せて愛讀する諸氏を擧れば、阮宣子、仲長子光、周彥倫、王績、王希夷、張無夢等なり、吾人は素より易と老子經とを併せて愛讀する者あるを見て、直に老子は易に基くの證と爲す者に非す、唯此傾向は上に擧けたる證明に一層の光輝を添え其說を強固にすと云ふ迄なり

其他老子は主藏室の吏なりしかは、群籍を涉獵し、幾分か之を參考とせしに相違なし、故に古書中老子の主義に合する者あるも怪むに足らざるなり、書經に勿爲聰明亂舊章とは老子の所謂愛民治國能無知乎と同し又書經に滿招損、謙受益とは老子の所謂

天之道、其猶張弓乎、高者抑之、下者舉之、有餘者損之、不足者與之、天之道、損有餘、而補不足、（第七十七章）と同く詩經（仲山甫）に柔嘉維則とは老子第四十三章天下之至柔、馳騁天下之至堅、第七十八章の天下柔弱、莫過于水、而攻堅强者、莫之能勝、其無以易之、弱之勝强、柔之勝剛、天下莫不知、莫能行、に同く書經大禹謨に克勤于邦、克儉于家、不自滿、惟汝賢とは老子經第二章の爲而不恃、功成而弗居、夫惟弗居、是以弗去、と云ふに同く又書經（說命）に有其善、喪厥善、矜其能、喪厥功、と云ふは是れ老子二十四章自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長と同意なり又周廟金人銘には强梁者不得其死、好勝者必遇其敵とは老子第四十二章に引く處の者なり此中には或は暗合せる者もあらん、然れども悉く暗合とするを得ず、故に此等の事實より考ふれは、老子は群籍中より多少道家主義を組織するに便なる材料を採用したるに相違無かるへし、然れども班固の如く道家者流出於史官、記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本、清虛以自守卑弱以自居と云に至ては誤謬たるを免れす

其他老子は直接に商容の如き師に就て自家學說の材料の幾分を得たるとは亦疑無し、然れとも其得たる極めて僅々なるへし、故に老學を以て商容より出つと云に至ては非なり、然るに守柔の道を得たるには、淮南子繆稱訓、說苑敬愼篇稽康聖賢高士傳の中商容傳に見ゆ、老子の守柔は恐く此商容より得しならん

正誤　前號老子論ミルレルの詩中unbe denteは unbe dentend とあるべし　又

登富嶽

七月上浣より、空文例に出りて飄然家を出で、歩に任せて去り、或ひは高岡に登りて遠眺し、或ひは海濱に臨みて長嘯し、詩を賦し、懷を馳せ、漫々として旬餘に及べり

一日富嶽を雲端に望み、殘雪の漸く消するを見て、游意勃然として起り、以爲へらく、我れ彼の絶巔に攀ぢ上り、一望の下に世界國土を歷覽し、千里を尺寸の中に、雲海を指顧の間に賞咏し、雪を嚼み、詩を吟して、以て年來の積鬱を一散するも亦甚妙なるべしと乃ち一友を得て以て行を共にせんと欲し、先つ家に還る、時に七月十三日なり、偶ま菌田宗惠君（老子論著者帝國大學を卒業して、將に其鄕里和歌山に還らんとし、途中より富嶽に上らんと欲するの意あり、友を求めて未た得す、空文を訪ふて其意を語らる、空文喜んで之に應し、十五日を以て行を啓く

十五日朝四時に起き出で、菌田君を三崎町の寓所に訪ふ、君の大人香潤師も亦茲に在り、道者三人新橋一番發の滊車に乘る

新橋より御殿場に至るの間は、每々見慣れたる山と、海と、田畝と、林木と、かはるがはる我等が半醒半睡の眼を遮るのみ、別に記すへき無し、但平常塵事に驅られて此間を來往し、心ろせきて滊車の速力を遲緩なりと感したる時に比すれは、今日胸中に一點の芥蔕なく、身神釋然として此野景に對するの意は、素より雲泥の差違あれとも、此意筆

天之道、其猶張弓乎、高者抑之、下者舉之、有餘者損之、不足者與之、天之道、損有餘、而補不足、(第七十七章)と同く詩經(仲山甫)に柔嘉維則とは老子第四十三章天下之至柔、馳騁天下之至堅、第七十八章の天下柔弱、莫過于水、而攻堅强者、莫之能勝、其無以易之、弱之勝强、柔之勝剛、天下莫不知、莫能行、に同く書經大禹謨に克勤于邦、克儉于家、不自滿、惟汝賢とは老子經第二章の爲而不恃、功成而弗居、夫惟弗居、是以弗去、と云ふに同く又書經(說命)に有其善、喪厥善、矜其能、喪厥功、と云ふは是れ老子二十四章自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長と同意なり又周廟金人銘には强梁者不得其死、好勝者必遇其敵とは老子第四十二章に引く處の者なり此中には或は暗合せる者もあらん、然れども悉く暗合とするを得ず、故に此等の事實より考ふれは、老子は群籍中より多少道家主義を組織するに便なる材料を採用したるに相違無かるへし、然れども班固の如く道家者流出於史官、記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本、清虛以自守卑弱以自居と云に至ては誤謬たるを免れす

其他老子は直接に商容の如き師に就て自家學說の材料の幾分を得たるとは亦疑無し、然れとも其得たる極めて僅々なるへし、故に老學を以て商容より出つと云に至ては非なり、然るに守柔の道を得たるには、淮南子繆稱訓、說苑敬愼篇、稽康聖賢高士傳の中商容傳に見ゆ、老子の守柔は恐く此商容より得しならん

正誤

前號老子論ミルレルの詩中unbe dentend とあるはunbe deutend 又Hampt sächlichste とあるはHampt sächlichste の誤植に付正す

登富嶽

七月上浣より、空文例に由りて飄然家を出で、歩に任せて去り、或ひは高岡に登りて遠眺し、或ひは海濱に臨みて長嘯し、詩を賦し、懷を馳せ、漫々として旬餘に及べり

一日富嶽を雲端に望み、殘雪の漸く消するを見て、游意勃然として起り、以爲へらく、我れ彼の絶巔に攀ぢ上り、一望の下に世界國土を歷覽し、千里を尺寸の中に、雲海を指顧の間に賞味し、雪を嚼み、詩を吟して、以て年來の積鬱を一散するも亦甚妙なるべしと乃ち一友を得て以て行を共にせんと欲し、先つ家に還る、時に七月十三日なり、偶ま菌田宗惠君(老子論著者)帝國大學を卒業して、將に其鄕里和歌山に還らんとし、途中より富嶽に上らんと欲するの意あり、友を求めて未た得す、空文を訪ふて其意を語らる、空文喜んで之に應し、十五日を以て行を啓く

十五日朝四時に起き出で、菌田君を三崎町の寓所に訪ふ、君の大人香潤師も亦茲に在り、道者三人、新橋一番發の汽車に乘る

新橋より御殿場に至るの間は、每々見慣れたる山と、海と、田畝と、林木と、かはるがはる我等が半醒半睡の眼を遮るのみ、別に記すへき無し、但平常塵事に驅られて此間を來往し、心ろせきて汽車の速力を遲緩なりと感したる時に比すれは、今日胸中に一點の芥蔕なく、身神釋然として此野景に對するの意は、素より雲泥の差違あれとも、此意筆

舌に上し難し、同乘の行客百千人は視て前者と做さん乎、後者と做さん乎

薗田君袖中より一冊の稿本を出して示さる、即ち君が日光より松島に遊びたる紀行なり、兩地の勝概を敘し、古を弔し、今を規し、且膝栗毛の上にも駕すへき君が失策話しを記し、同學の隨評、揚げ足し的の批判をも列記したり、今現に其人と共に此出塵の游びを始め、而かも東海道中に、かゝりたる、余が心のおかしさは、蓋し空文の讀者に非れは會す可からす

松島の紀行を僅かに讀み了りたる頃、瀛車は恰も御殿場に着けり、三人傍らの店に憩ふ、十時三十分なり

薗田氏の親戚甲斐の吉田に在り、故に三人は先つ吉田に着し、香潤師は暫らく彼地に止まり、我等兩人は富嶽に登り、下り來れは再たび此御殿場に於て三人相會すべしと、閑議否客議茲に一決せしかば、蓋餐を喫し、此より馬車を雇ひて須走に赴く、車は東京の圓太郎馬車よりも簡單なれとも、彼れか如く輕快ならす、否其輕快なるを欲せす、凹凸なる道路を雨後の泥濘に頓着なく馳せゆく、之に慣れたる馬よりも、御者よりも、先つ乘客の骨折りなり、凹處凹處に至れは此方より先つ請ふて車を下る、此間三里、須走に着く

御殿場より此に至る間は、前後左右皆山なり、一徑其間を貫通して、吉田を經て府中に

至る、府中其他の諸驛より、御殿場へ出たす物貨を運般して、駄馬の往來繁し、馬車腕車をも通すと雖とも、阪路險峻にして腕車には適せす

須走より吉田まで、四里半、又馬車を雇ふ、雨大ひに來り濡れて寒し、此間は富士の裾野を横斷して、稍開闊なり、右手に一大池を見る、是れ山中湖なり、池水は北に溢れ、東に赴き、猿橋を過ぎて相摸に瀉ぎ、馬入川となる、右に此池を瞰下し、左に富嶽を斷雲の間に見上る、此邊の景大ひに好し、何はさて置き此身昨日までは紅塵漠々の中に呻吟せしを、今は一躍して亂山堆裏の身となれる、其愉快さは詩にも、歌にも、中々に述ふべからす、薗田君曰く此處には社會も無く、交際も無く、恰も太古の世、渾沌未分の時に似たりと、然り、太古渾沌の地に來りては、復た路の險夷と、景の凡勝とを問ふに遑あらさるなり

夕刻吉田に着く、旅店に小憩し、香潤師の嚮導に從ひ、福源寺に至る、寺は元と禪家の古刹、今は眞宗に屬す、門内宏濶堂前に一大垂絲櫻あり、其他一物を見す、眞に靜境なり、此に宿す、寺僧丁因師懇待せらる

十六日、天陰る、寺の什寶なる鹿戸皇子の畫像を觀せらる、相傳ふ、皇子の自筆に係ると、其然るや否を知らされとも、極めて古畫なり

此地に四寺あり、福源寺、如來寺、正福寺、大正寺と曰ふ、皆古刹なり、住僧亦皆凡ならす、各

來りて香潤師を饗し、且我等を懇遇せらる、午後如來寺に游ひ、藏幅を見る、後桃園天皇の宸筆あり、御製に曰く

行路雪

かち人の行かふあとも見へぬまて降つもりたる今朝の白雪

又藤原資枝卿の書せる一紙あり

聖德太子駐馬の勝地富士山駒嶽の歌鄙俗太子の御製と云傳ふいといふかし

正二位　藤原資枝

みちとせにあふことまれの黒駒に法のこゝろを今そしるへき

又游行上人の書あり

他阿

甲斐の猿橋を渡り駒橋と云ふ處にいたりてよみ侍りける

猿橋を渡りて見れは駒橋やおとりはねつゝかけて飛らん

此他什寶數多けれは悉く見す

此地氣候涼し此頃武藏に於ける麥秋の候の如し、麥は野に熟して未た苅り收めず、胡瓜を進めらる、寺僧曰く今年始めて之を食す、茄子は未た花を着けすと

我等將に明日を以て宿志を果さんと欲す、寺僧天氣惡しきを以て留めらる、我等曰く、明日陰らは則ち留まらん、晴るれは則ち行かんと、心竊に晴を祈る、夜に入りて風雨大

ひに至る、失望して寢に就く

十七日、夜雨頓に晴れ紅旭窻に入る、驚き醒むれは已に六時なり、庭前に出てゝ仰き眺めは芙蓉八朶淨くして拭ふが如し、急に行裝を整へ、嚮導者を雇ふ、謂はゆる剛力なる者是れなり、餅一器、酒一瓶、短衾二領、草鞋數束を剛力に負はしめ、我等二人は草鞋を穿ち、金剛杖を率き、辭して寺を出つ、寺僧淺間神社まで送らる、祠畔より嶽麓一合目まで三里、即ち裾野なり

凡一里許りは蒼松立ち茂り一徑其下に通す

杪頭戛々聽仙禽、一徑如絲草色深、行入林中人不見、風翻松露灑衣襟

林を出つるも猶裾野なり、氣候春夏の交の如し、諸種の草花亂れ開らき、野禽其間に飛ふ、乃ち又晩秋の意況あり、漸く麓に達す、乃ち一合目なり

是れより五合目までは、老樹森々として枝を交へ、白雲深く鎖して、陰氣人に逼まる、道路猶甚たしく險ならす、樅、杉、唐松の枯葉、靡々として足指を沒す、唐松殊に多く、往々大木を見る、又石楠花處々に開らく

毎合に石を建つ、其距離近きは七八丁、遠きは十餘丁に及ふ、道の險夷に由りて同しからす、險なれは近く、夷なれは遠し、處々に茶店を設け、夏時二个月の間戸を開らき、其他は鎖す、此頃猶登嶽者の少なきを以て都へて鎖せり、五合目に至りて飯顆を喫す

六合目に至れば、雲霧全く霽れて、一望涯際無く、萬山皆我れより低し、嶽麓に五湖あり、其中二湖を見る、一を山中湖とし、二を川口湖とす、俯して之を見る、水深碧、殆と我等の影を照さんとす

五合より以上は峭然として削るが如く、全山境塉、焦礫より成り立ち、絶へて草木を生せず、六合以上は行路全く絶へ、たゝ微に人の足跡を見るのみ、蓋疾風砂礫を捲き、人迹も、亦隨ふて滅却し、遂に徑を成さず、七合以上處々殘雪あり、連亘十餘丁深さ數尺、巖を攀ぢ、砂を踏み、餅を食ひ、勇を鼓して、漸く八合に達す、午後六時なり、此處に小屋あり、巖に倚り、石を壘み、纔かに風霜を障ふ中に一老人一壯者あり、爐に依りて坐す、外に登嶽者二人、剛力一人、先つ在り、我等を併せて八人とす、此地人境を距る數里に過きすと雖とも、道途懸絶、殆と異境に來るの看あり、八人爐を圍み、米を炊ぎ、老人味噌汁を作る、其味ひ人間の烟火と同しからす、蓋空氣稀薄にして自ら下界の烟火と異なるの理も有るなり、天台の麻胡飯、嘗陀河の麥飯、無量亭の豆粥は故るし、我等は頗る新奇の境に來り、新奇の食を爲すの想あり

重衾を襲ふて戸外に出つれば、風威凜烈佇立すへからす、下界を一望するに、白雲漫々、視力の達するところを極はめて更に一物の眼に入るもの無し、雲種々の形を成し、聚りて山岳を成し、崩れて巨瀑を成し、波濤の如きもの、氷塊の如きもの、獸形の如きもの、

妖怪の如きもの、倏忽變化、姿態萬狀なり、嗟呼何の天にか雲無からん、何の地にか風有らざらん、只我等の視て以て奇觀となす所以のものは大ひに理あるなり、万重の白雲、世界を遮斷し、而して我等居るところの地は、則ち此白雲の上猶千尋の高處に在りて恰も空中に懸るか如く、星月燦爛として之を照す、俯して白雲を瞰るも、視て白雲と做す可らさるなり、園田君余に謂ふて曰く、君何を以て此境を目せんや、曰く、我等瀛球に乘じ、誤りて氷海の上に漂ひ、下、氷山の崩壞を眺むるのみと、蓋奇寒骨に入り、極北の地に在るか如し、此景風に嶽上第一の勝なり、翌日絶巓の望、却て此奇絶無し、瓢酒を傾け盡くして詩を吟す、音吐高く響かず、園氣の沸きか爲めなり

十八日、朝晴、四時に起きて戸を開らき、旭日の東天に上るを待つ、已にして天半燒くか如く、紅旭徐々に地平線を離る、亦奇觀なり、然れとも曾て聞くか如くに奇ならす、茶を飲み、餅を喫して出つ、我等携ふところの剛力、困臥して起つ能はす、乃ち他の三人を併せて五人、絶頂に向つて登る、一歩一喘、漸く最高の處に達す

頂上に一大噴火口あり之に、臨めは溪壑の如し、雪滿ちて其深さを知るへからす、口の周圍は十丁に餘まるへし、我等之を一匝せんと欲す、雪多くして行くへからす、乃ち東南の二面を繞りて己む、今日の景は目するに奇を以てすへからす、宜しく壯麗巨觀を以て題すへし

相摸の箱根、足柄、甲斐の天目、金峯、駒嶽、鳳凰、白根、身延の諸山は皆俯して之を瞰るべく、更に眸を放ては、南端に大島を望み、東方に筑波日光の諸山、東北に赤城、妙義、西北に淺間嶽一帶の連山あり、皆指點して以て辨すべく、其他は縹緲として涯際を知るべからず、東南は則ち茫茫の雲海にして、水天漠々たゝ視力の竭くるところを以て限りとす、

空文登嶽行を作る其辭に云

一氣神秀凝爲嶽、惟我富嶽於天地最卓直立万丈玉出璞、万古之雪藏碧落、巒絲不許着塵脚、晩到大麓風雨悪、雷霆撲樹夏降雹、未進一步先覺魄、退而祈晴竭虔恪、明旦雲霽天宇廓、造化之文章不勞斧鑿、湧出天地一大作、半壁以下宏浩而淵博、後半飄逸難湊泊、仰望絶巓眸子眩、俯瞰萬山似螺殼、緊風捲沙而如剝、寸木不生、焦土塊、我僕鼾矣我足躍、夜叩寒扉宿巖幄、洞中白雪供吟嚼、匝簷星月可把捉、不問人間招仙閣、地下彷彿聽仙樂、試望下界既溟邈、万重白雲隔珠箔、却疑大地之一角、忽向他星界飛躍、奇塞入骨夢屢覺、紅旭出海天欲爍、起辭巖扉躡繩屩、一徑殘雪步垠堮、芙蓉八朶懸虛霧、只見乾坤一跳踔、神清意遠身乘黃鶴、又駕龍驥不施銜、約信山越山紛交錯、東瀛南溟都漠々、手掬霜瀝分鮮飩、風飄衣袂且盤礴、嗟呼人生有累自甘羈縛、浩蕩仙術奈難學、明日還家望雲崎、寒光入戶照寂寞

歸路は須走に向つて下る、絶頂より三合目邊まで最も險峻、此路は下るに宜しく、上るに宜しからす、直下萬尺斜めに焦礫の上を飛ふ、快絶なり

午後一時、須走に達す、香潤師先つ茲に在り、相共に馬車を雇ひ、御殿場に至りて別る、瀛車東西に分れ、薗田父子は西に向ひ、空文は獨り東に向つて還る

車中諧謔

甲州の途上に、宗惠君曰く、山多くしてヤマナシ(山梨)とは如何、空文曰く海無けれどもオホウミ(近江)と謂ふが如しと、宗惠又曰く、地に在りてツラマメ(蠶豆)とは如何、香潤師曰く天に在りてハヽキボシ(彗星)と謂ふか如しと、因りて大に笑ふ

聯句

曾て聞く或人一休禪師を訪ひ、紫野近丹波の句を作る、一休之に對して曰く白川隣黑谷と、又或禪侶曰く櫻東山地主と、他の一人梅北野天神を以て答ふ、又月是無量壽と曰へは一人山夫不動尊と答ふ、又夢得劉夢得に對し、寤生鄭寤生と曰ふ

又聞く、李長吉の句、天若有情天亦老に對するに、石曼卿、月如無恨月常圓を以てす、解縉同僚と共に舟中に飲み、偶ま水中の青蛙を見る、同僚曰く出水蛙見穿綠襖、美目盼分と、解曰く落湯蝦子着紅袍、鞠躬如也と、又或人少時に、庠學の師より赤爾何如、點爾何如、各言其志の句を出し對を索められる、其人答へて曰く、回雖不敏、雍雖不敏、請事于斯と

東坡曾て佛印禪師と話す、蘇、曰く、八曾爲僧、八弗可以成佛、佛印曰く、女卑爲婢、女又不

妨稱奴。と

東坡妾琴操を携へ佛印と共に舟を泛ふ、佛印船頭に在りて篙を撑ふ、琴操曰く、和尚撑船篙打江心羅漢、と佛印曰く、佳人汲水、繩牽井底觀音、と佛印又曰く、一個美人映月、人間天上兩嬋娟、と琴操曰く、五百羅漢渡江、岸畔波心千佛子、と

佛印一日東坡の書齋に至る、適ま蘇の小妹も亦在りて遂に帳中に避く、佛印曰く、碧紗帳裏坐佳人、烟籠芍藥、と小妹曰く清水池邊洗和尚、水浸葫蘆、と

佛印米元章と共に雪梅を見る、米曰く雪裏白梅、雪映白梅梅映雪、と佛印曰く風中綠竹、風翻綠竹竹翻風、と

高季迪僧と同しく山中に月を玩ふ、高曰く嶺上高亭、明月清風留客醉、と僧曰く山中古寺、白雲流水伴僧閒、と

三宿富山下

朝辭富山下、暮至富山下、富山行不窮、三宿富山下は白石の詩なり、今日は瀛車二三時間を以て富山の下を經過し去るへし、然れとも空文此回富士の山上山下に三宿したり空文曰く、不二山は宜しく一たび登るへし、須らく二たび登るべからずと

壯句

空文富士の絶頂に上りて詩を賦し切に壯麗の句を吐かんと欲して得ず、適ま韓退之陸渾山の詩、天跳地踔顛乾坤赫々上照窮崖垠の句を記し其意を轉して芙蓉八朶懸虛霧、只見乾坤一跳踔の句を得たり、意通すべきや否やを知らず、因りて記す、李白に懸崖攬八極、目盡長空閑、杜甫に日月籠中鳥、乾坤水上萍、の句あり、蓋古今の壯句此上に出つるものの有らざるへし、且籠中鳥、水上萍もと流麗の文字なり、流麗の文字を用ゐて壯大の意を現はす、以て富士の巨觀に匹敵すへし

芥子容須彌

或人曰く、日月籠中鳥、乾坤水上萍の句壯麗は則ち壯麗なれとも、意義の解すへからさるを奈何せんと、空文答へて曰く、我れ聞く唐の李渤歸宗禪師に問ふて曰く、須彌の芥子を容るゝことは僕固より疑はす、芥子の須彌を藏することは恐らくは此理有ることと無らんと、歸宗曰く、人は言ふ李學士萬卷の書を讀むと是れ有りや否や、渤曰く然り、歸宗曰く此の心椰子の大さの如し、萬卷の書何の處に容れられんと、日月籠中鳥、乾坤水上萍、解すへからすして會すへし

富嶽は山の聖

莊子曰く至人は水に入れとも濡れす、火に入れとも熱せすと、世間豈水に入りて濡れす火に入りて熱せさるの人あらんや、是れ解すへからす、然れとも聖人の心廣大絶特、若し逆境に陷り、困厄の中に在りと雖とも、毫も戚々苦悶の狀無く、猶富嶽の雲表に在

るが如し、故に曰く之を仰げは彌よ高し、と、蓋聖人は人中の富嶽にして富嶽は山に於ける聖人なるへし

山川人を益す

我れ聞く司馬子長、天下の名山大川を周覽して以て其文章に得る所有り、故に其文雄渾にして奇特なりと、泰西の文學者亦皆高山大壑を窮覩して、以て造化自然の美を察すと云へり、空文もとより文辭に拙なり、蓋其才の名山大川に由りて以て煥發すへきもの已に缺乏せり、故に天下第一の名山に登り來るも、毫も其文辭に益するところなし、是れ大ひに恥つへし

然れとも文辭以外に於て少しく得るところ有るか如し、蓋山川の人を益する其功偉大なるもの有らん、發して文に現はるゝものは只其一端のみ、明の旺文盛萬山を叙して曰く、直なる者は吾以て方と爲すを得る、曲なる者は吾以て智と爲すを得る、岈然たる者は吾以て宏と爲すを得る、巖にして而して邁なる者は吾以て節と爲すを得る、男にして崩なる者は吾以て奇と爲すを得る、其摩霧峻極の勢は以て吾氣を作す可し、其開闔變化の狀は以て吾文を發すへし、其生育植養の功は以て吾仁を推す可し、其升降欹正の形は以て吾守を固くすべし云云、此論山水の洪益を曲盡して餘蘊無きか如し、然れとも天地自然の美、名山大川の間に存する

者是れ言語を以て狀すへからす、按するに孔夫子川上に在りて曰く、逝者如斯夫、不舍晝夜と、曰く知者樂水、仁者樂山と、又東山に登りて魯を小とし、泰山に登りて天下を小としたるか如き、其心胸を開豁して以て其道機を觸發したるものに非る歟、詩に云く、鳶飛戾天、魚躍于淵と、李白云く精神四飛揚如出天地間と、柳子厚曰く悠々乎與灝氣俱而莫得其涯、洋々乎與造物者游而不知其所窮、心凝形釋與萬化冥合と、是れ皆其山川に得るところのものを言ふなり、古人曰く山を見るは猶書を讀むか如く、大小高卑各其人の識見に由ると、空文の見所は固より小なり、下なり、然れとも曾て益するところ無しと言はす

心會

意義は言語を以て解くへきもの有り、心を以て會すへきもの有り、鶴林玉露に曰く、黄龍寺の晦堂老子嘗て山谷に問ふに、吾無隱乎爾の意義を以てす、山谷詮釋再三、晦堂終に其說を然りとせす、時に暑退き、冷生し、秋香院に滿つ、晦堂因りて問ふて曰く、木犀香を聞く乎、山谷曰く聞く、晦堂曰く、吾れ爾に隱す無しと、山谷乃ち服す云云、

爛漫

天眞爛漫、百花爛漫等爛漫の語今人多く之を使用す、空文初め其意を會するか如く、又會せさるか如く、曾て之を用ゐんと欲して遂に已みたり、一夕清野勉君と話す、君亦此語を擧けて其意味を問はる、蓋天眞爛漫は王陽明の語錄に本つく、又胸中爛漫富丘壑、信手塗抹皆天眞は文徵明の句なり

佩文韻府には瀾漫に作り、且其例を擧く、淮南子夏桀之時主闇晦而不明、道瀾漫而不修、王褒洞簫賦憚憚爛漫亡耦失偕、左思嬌女詞濃朱帝丹唇、黃吻瀾漫赤云云、又莊子には大德不同而性命爛漫矣、杜詩に定知相見日、爛漫倒芳樽、己發形骸累、眞爲爛漫、李白の詩に身世殊爛漫、田園久蕪沒、退之の詩に近憐李杜無撿來、爛漫長醉多文辭、此他に有酒有酒方爛漫、飲酣拔劍心眼亂、六七年前狂爛漫、三千里外思徘徊等の句あり、爛漫の意義解すべきか如く、亦解すべからざるに似たり

空文第四號

可解不可解

詞藻の妙は解すべく解すべからざるの間に在るか如し、深山大澤龍蛇遠春寒野陰風景暮路經邇頽雙蓬鬢天入滄溟一釣舟關塞極天惟鳥道、江湖滿地一漁翁、これ言語を以て解くべからず、月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠も亦常理を推すべからず、蓋妙其中に在り

文字有限情致無限

蓋文辭の解すべからざるは文辭の妙には非るなり、たゝ文字限り有りて情致限り無し、作者有限の文字を以て無限の情致を盡す能はず、讀者をして意を言外に翫味せしむるのみ、老子の言語其不監の理致を言ひ現はす能はざるなり、江湖滿地一漁翁これ子美が無限の感愴を盡ひ現はさんと欲して而して能はざるなり、然れども子美の詩已に人をして無限の情致を感想せしむるに足る、是れ其文辭の妙たる所以なり、古人曰く雪を繪くものは其情を畫く能はず、月を繪くものは其明を畫く能はず、花を繪くものは其香を畫く能はず、泉を繪くものは其聲を畫く能はず、人を繪くものは其情を畫く能はず、但高妙の畫手は其畫く可らざるところに至りては人をして之を想像せしむ、詩文の作家も亦然りとす

佩文韻府には瀾漫に作り、且其例を擧く、淮南子、夏桀之時、主闇晦而不明、道瀾漫而不修、王褒洞簫賦、憚怳爛漫、亡耦失儔、左思嬌女詩、濃朱衍丹唇、黃吻瀾漫赤、云云又莊子には大德不同、而性命爛漫矣、杜詩に定知相見日、爛漫倒芳樽、己撥形骸累、眞爲爛漫深、李白の詩に身世殊爛漫、田園久蕪沒、退之の詩に近憐李杜無撿來、爛漫長醉多文辭、此他に有酒有酒方爛漫、飲酣扱劍心眼亂、六七年前狂爛漫、三千里外思徘徊等の句あり、爛熳の意義解すへきか如く、亦解すへからさるに似たり

可解不可解

詞藻の妙は解すへく解すへからさるの間に在るか如し、深山大澤龍蛇遠、春寒野陰風景暮、路經灧澦雙蓬鬢、天入滄浪一釣舟、關塞極天惟鳥道、江湖滿地一漁翁、これ言語を以て解くへからす、月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠も亦常理を推すへからす、蓋妙其中に在り

文字有限情致無限

蓋文辭の解すへからさるは文辭の妙には非るなり、たゞ文字限り有りて情致限り無し、作者有限の文字を以て無限の情致を盡す能はす、讀者をして意を言外に翫味せしむるのみ、老子の玄之又玄衆妙之門、これ老子の言語其不盡の理致を言ひ現はす能はさるなり、江湖滿地一漁翁これ子美が無限の感愴を言ひ現はさんと欲して而して能はさるなり、然れとも子美の詩已に人をして無限の情致を感想せしむるに足る、是れ其文辭の妙たる所以なり、古人曰く雪を繪くものは其情を畫く能はす、月を繪くものは其明を畫く能はす、花を繪くものは其香を畫く能はす、泉を繪くものは其聲を畫く能はす、人を繪くものは其情を畫く能はすと、文辭に於て亦然り、道破すへからさる處多し、但高妙の畫手は其畫く可らさるところに至りては人をして之を想像せしむ、詩文の作家も亦然りとす

●速記雜誌 第廿九號 ●一部定價八錢 十部前金七十錢（郵稅共）

◎論說 衆議院委員會の速記事務に就て
◎寄書 速記術改良論（續）……會員 荒浪市平
慣悱小史に寄す……會員 牛山生
獨乙國ガーベルスベルゲル派速記術記念祭の況……蹇活子
版權法案の議速記錄を讀みて……ヨヨ生
衆議院議員諸君に御相談……長崎 菊亭閑人
◎速記小言
速記社會を見渡せは……傍觀生
辨當箱の保險……威服子
◎雜報
兩院臨時雇速記者の解雇●兩議院速記錄の號數及員數●衆議院規則追加案●衆議院速記者懇親會●貴族院速記課員懇親會●前橋市會●奈良縣警察部の速記敎授○和歌山速記學會●神奈川縣巡査速記學敎習●選擧干涉の速記錄叡覽に入る●其毆擊●選擧干涉に關する參考書類●貴族院に御注文せむ●新聞記者及通信者に申す●東錦●速記者●波多野鐵太郎氏●新井田次郎氏●源綱紀氏●速記法研究會員の地方出張●速記用紙
●速記懇話會記事
◎速記懇話會記事
◎同音異字集（續）……の一生

發行所 東京市神田區裏猿樂町四番地 速記法研究會

●婦人雜誌（第六卷第四冊）第五拾四號

●目錄○說話○女監取締養成所設立の必要○女監取締目今必要の有機○女監取締養成所設立の方法●法話○故勸學勞謙院普讓師の法語●交際○歐洲上流近世交際法（接續…今立吐醉）●雜錄○實時の觀想食時五思（番入）○田舍鼠と都鼠●雜記○賓客を待遇するの心得○名刺の折方●祝辭○本願寺文學寮落成式塲同派法主の祝辭●月報○皇后陛下の御指環○眞俗に奇特の婦人○法話會の看病婦學校○佛敎者新婚式例○禁烟會○京都女學校の風儀亂る○奇妙な嫁入り

●教學論集の見本一冊及び總目錄「往復はがき」にて御申込次第無代價にて進呈す御遠慮なく御申込の上愛讀を希ふ

●敎學論集 自初編至七十七編（既刊分）七十七冊
特別減價 金貳圓四拾錢 郵稅金六拾錢
合計金參圓御送付次第早速取次配達申上候

發行所 東京市日本橋區槇町一丁目十一番地 婦人雜誌社

諸新聞雜誌社に謹告す
從來御交換を辱ふせし「敎學論集」雜誌は例の遞信省認可無之に付暫時休刊仕り候、就ては茲に「婦人雜誌」を其代りとして配送申上候條以來は敎學論集同樣に交換被成下候はゞ大慶の至りに不堪候 敬白
東京築地三丁目 敎學會
同日本橋區槇町 婦人雜誌社
追て御交換被下候貴誌は從前の通り敎學會宛御送付被下候共又婦人雜誌社宛なり共編輯人は同人に付御都合にて何れ共宜敷候

●見よ大改良の本誌を●

活少年

毎月一回發行○一部前金四錢五厘○送金ハ高田局へ郵便○主幹島崎典○宛社中代用ハ一割増○通信送金は配達料御添附之事○見本は郵券五錢送らされば發送せず

第五號既刊

各官衙軍人學校は前金を要せず御捺印申込あらば賞章佐々木伯爵閣下より賞與あり

本領寄書

●敬育上に於ける稽古の意見に就て山口太郎氏○兵庫県の移住民

論說

諸氏の高説を初め○滿洲の新天地○廣瀬中將○北村大將○山田大將○太宮學士○西園寺侯○在米の日本人○其他諸氏の論説は明快なる筆致にて世人の注目する所なり

懸賞文

(小説)佳境に入る(海)詩解(談)件三種(詩)名家(載)數十篇(傳)漁夫(史)東海(文)章數篇(書)錦囊(論)策(歌)詩(圖)畫(説)世(雜)學(人)其他諸氏の論説は(家)の(新)(聲)(醒)(明)(快)(新)(警)(醒)(學)(人)(其)(他)(諸)(氏)(の)(論)(説)(は)(雄)(圖)(遠)(略)(經)(世)(界)(の)(大)(勢)(を)(初)(め)(諸)(氏)(の)(高)(説)(を)(掲)(ぐ)(る)(ハ)(本)(誌)(の)(特)(色)(ナ)(リ)

文學

吾が文學は諸大家の協賛に成りて廣く古今東西の鄙俗を拔き精を選び平易に能く吾が文學流を吟味し華を拔き高尚に指南車を失せざるべし

今や文學界に於て温雅にして不遍適良なる世人若し能く吾が文學に就て研修せば以て人生の幸福を得ん

(毎月一回五日廿日發行)

(七月廿日第十一號發行)

切ノ郵券ハ本誌ノ代用ニ使ハレ

增加ハ詳細ハ活少年第一號ニ出ス

○廣告料ハ一頁金八拾錢○半頁金五拾錢○四分の一頁金三拾錢○六冊前金四十錢○外國郵便税一冊郵券二錢○郵券代用一割増

再版八錢

(毎月一回五日廿日發行)

發行所 東京本郷區湯島天神町三丁目四十四番地 博學館

本誌ハ毎月二回一日十五日ヲ以テ發行ス

本誌ハ左記ノ定價ニヨリ前金收入スルニアラサレバ一切送本セス

本誌代金廣告料トモ領收證ヲ出サス特ニ領收證ヲ望マル、方ハ郵税(壹錢)ヲ申受クヘシ

本誌代金及ビ廣告料トモ現金若クハ爲換金ヲ以テ拂込マルヘシ若シ郵券ヲ代用スルトキハ必ス一割増ニテ申受クベシ

注文書ハ住所姓名トモ楷書ニテ記載セラルベシ

凡テ爲換ハ拂渡局小石川郵便局受取人空文社タルベシ

●空文定價

一冊 六錢　六冊 三十三錢　十二冊 六十錢

一冊郵税五厘

●廣告料

五號活字二十四字詰一行ニ付 金七錢

明治廿五年七月三十一日印刷

明治廿五年八月一日出版

東京市小石川區諏訪町廿二番地

編輯人 菅了法

東京市小石川區諏訪町廿二番地

發行兼印刷人 神谷一郎

東京市小石川區諏訪町廿二番地

發行所 空文社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 秀英舍

東京市神田區表神保町三番地

大賣捌 東京堂

本誌ハ毎月二回一日十五日ヲ以テ發行ス
本誌ハ左記ノ定價ニヨリ前金收入スルニアラサレバ一切送本セス
本誌代金廣告料トモ領收證ヲ出サス特ニ領收證ヲ望セル、方ハ郵稅(壹錢)ヲ申受クヘシ
本誌代金及ヒ廣告料トモ現金若クハ爲換金ヲ以テ拂込マルヘシ若シ郵劵ヲ代用スルトキハ必ス一割增ニテ申受クベシ
注文書ハ住所姓名トモ楷書ニテ記載セラルベシ
凡テ爲換ハ拂渡局小石川郵便局受取人空文社タルベシ

●空文定價

一冊　六錢　六冊　三十三錢　十二冊　六十錢
一冊郵稅五厘

●廣告料

五號活字二十四字詰一行ニ付　金　七　錢

明治廿五年七月三十一日印刷
明治廿五年八月一日出版

東京市小石川區諏訪町廿二番地
編輯人　菅了法

東京市小石川區諏訪町廿二番地
發行兼印刷人　神谷一郎

東京市小石川區諏訪町廿二番地
發行所　空文社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　秀英舍

東京市神田區表神保町三番地
大賣捌　東京堂

明治廿五年六月十五日遞信省認可

各新聞雜誌の批評

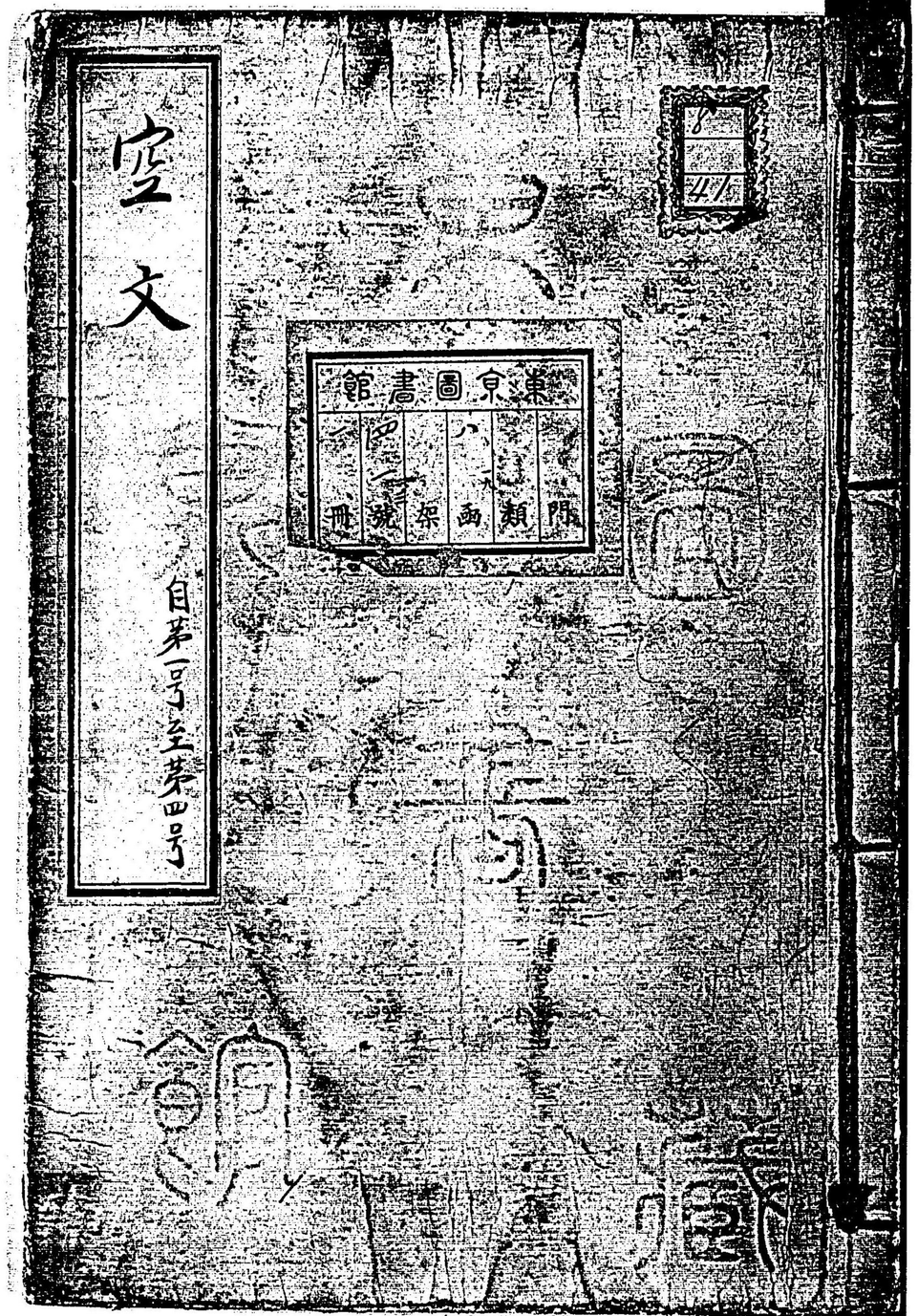
●陸奥新聞　文學專門の一雜誌菅了法氏の執筆にて空文てふ一雜誌出つ欄を史談詩文雜記の二大門に分ち史談欄は和漢及西洋諸國の史中より博く史料を蒐めたる中史を論すと題したるは一大議論にして歷史の定義及ひ作史の法に就て漢歐諸家の說を引用し史家は一大理想を具へて史の全部を貫穿せさるへからす前代の史家は理想に代ゆるに感情を以てしたり故に黨同伐異の弊窩に陷りて敢て悟らず顧襄亦た之を免れす史家は宜しく只一の理想を以て千古の蠟察を立つべしと論じ進んでヒーグルの類別法に從て歷史と原料的觀察的哲學的の三つに分ち原料觀察の二を評論し文明史に至りて空文氏病むと稱して筆を擱きしは遺憾又た詩文雜誌古今諸大家の評論等あり文學に志あるもの坐右に備ふるあらば又た補ふところあらん

●奥羽日々新聞　歷史詩文に就ての所說字々益々崭新句々愈々警拔寂々暗澹たる文學界に光芒一射人をして後に瞠若たらしむるものあり、維新以前に於ける外國新聞抄譯の如き大に當時の實情を窺ふに足る吾人は信す其題空文と稱するも必らずや其實を擧て我文學界に益する所多からんとを

●福井　語に曰く殷鑒不遠と、殷既に鑒るべくんば何れの代何れの國か鑒るべからさらん、史談の吾人を益する斯の如し、而して「空文」の史談か殊に時弊に適切にして一再讀過覺へす點頭せしむるものあるを覺ふ「空文」の詩文雜記例なから瀟洒出塵其詩人難と題する四篇の如き殆ゞマコーレイのミルトン論を讀む心地す曰く今の詩人は則ち時に逢はさる秀吉のみの一句道破し得て奇警なりと評す〳〵し其採錄する所の園田文學士の老子論該博正確「空文」の爲めに色を添ること多しと云ふへし

●上毛新聞　正に本編に至つて金聲を發せり其の史談に東西の暴君暗主が國を亡ぼすの狀端なくも轍を等しくするを敘せるもの吾人空文子の經營と感慨とに同感を表するものなり又詩文雜記中老子論(文學士園田宗惠氏)は流石に著者の卒業論文ありて考證該博論斷明瞭一讀老子に親接するの感あり炎暑の候之を讀んで殊に心氣の清凉を覺ふ

●東海曉鐘新聞　俗塵を脫し俗腸を離れ洒々たる筆を以て灑々たる文を以て能く時弊を詬詈するは此誌の本領なり吾人一讀の下思はす案を拍て感憤するの記事尠なからず菅氏の用意亦た周到と謂ふべし



085057-000-3

8-41

空文　第1－4号

空文社

M25

DBB-0504